

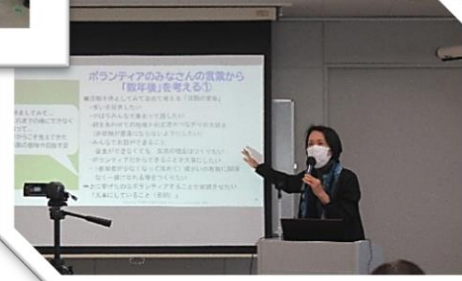
とつかボランティアセンター通信

ボランティアのつどいを開催しました



裏面
ボランティア
センターに
登録しま
せんか

2021年12月3日、「ボランティアのつどい」が開催されました。参加者17名は、テーマ「紡いできたつながりをチカラに変えるには？」の澤岡詩野さん（ダイヤ高齢社会研究財団）の講義を中心に、それぞれのボランティア活動について振り返りました。



澤岡さんのお話の概要：「なんのためにボランティアを始めたのか」「大事にしてきたこと」は何なのかを思い返しながらか Corona禍で変化した期間の活動を振り返ると・・・

「だからこそ見えてきた活動の意味や目指す姿」がわかってくる。そして、「馴染んだ誰か」とのつながりの力を再確認。福祉や医療の専門家にも家族にもできない、寄り添ってきた顔なじみや仲間だからできることがある、ということ。いつもの人達が「気にしてくれる」それが『お互いの』チカラになる。これまで形にしてきた「大事にしていること」を途絶えさせないことが最も大事。

コロナでも、自然災害でも、虚弱化や要介護状態でも「やりたいこと」を続けられるように、これからのボランティア活動には置き換え可能な『手段を複数持つこと』が求められる・・・



「つどい」を終えて…
(講師・澤岡さんの感想)

長引くコロナ禍によりやうやく開催された「ボランティアのつどい」でしたが、感染予防とお隣の工事現場の騒音でグループワークは残念ながら断念…。かわりに個々に感じたことを書きだして頂いたシートには、活動を以前のようにできない口惜しさや支えていた

相手への心配、生きがいを見いだせない焦りが溢れていました。そんなもどかしい想いと共に伝わってきたのが、今まで活動を通じて紡いできたつながりをチカラとするために「できること」に目をむける強さでした。「見かけた時に大きな声であいさつしていたのは間違っていたのね」と嬉しそうにうなずく方、「いつもの場はできなくても、我々が気にしていることを知らせるだけでも意味がある」と膝を打つ方など、様々な姿がみえました。

これまでの日常が否定されるコロナ禍のなかで、変化にしなやかに適応するチカラ「レジリエンス」に注目が集まっています。参加された皆さんの言葉や姿から、ご自身の生活だけではなく、不安や孤独を抱える近場の誰かの小さなレジリエンスをひきだすチカラを感じた集いでした。